# 八反田古墳

広島県世羅郡世羅町徳市所在古墳の調査

1981

広島県教育委員会

(財) 広島県埋蔵文化財調査センター

# 例　　言

1. 本書は，昭和56年度に広島県教育委員会と，(財)広島県埋蔵文化財調査センターが実施した八反田古墳（世羅郡世羅町徳市所在）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は，松井和幸（(財)広島県埋蔵文化財調査センター調査研究員），福島政文（広島県教育委員会文化課指導主事），平林工（調査補助員）が実施した。
3. 遺構の実測には，松井・福島・平林が当り，写真撮影，遺物の実測，トレースは松井が行った。
4. 本書の執筆は，松井（Ⅰ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ），福島（Ⅱ）が分担し，松井が編集した。
5. この古墳は当初「目谷古墳」（通称）と呼ばれていたが，遺跡カード等の整理の結果，以後は「八反田古墳」とする。

# 目　　次


Ⅰ　はじめに …… (1)
Ⅱ　位置と環境 …… (2)
Ⅲ　調査の概要 …… (6)
Ⅳ　遺　物 …… (12)
Ⅴ　まとめ …… (14)

# I はじめに

本書は，国営広島中部台地農地開発事業に伴って建設される目谷ダムの管理用道路路線内に係る八反田古墳発掘調査報告書である。国営広島中部台地農地開発事業は，広島県中央部（甲山町，世羅町，世羅西町，大和町及び久井町）に広がる標高400～500*m* の世羅台地の開発可能地704*ha* を対象として，たばこ・野菜・なし・ぶどう・花木・飼料作物の栽培に適用する610*ha* の農地（24団地）造成と，畑地かんがい施設の整備を行ない，規模拡大志向農家144戸に配分することを目的としたもので，昭和46年11月に基本計画の樹立が申請され，昭和52年度から10ヵ年間の工期で現在建設工事が進められている。こうしたなかで，昭和49年6月に広島県農政部から県教育委員会に対して，国営広島中部台地農地開発事業地内における埋蔵文化財の有無ならびに取扱いについて協議があり，これをうけて，県教育委員会では昭和50年度に分布調査を実施した。その後，目谷ダム管理用道路に係る八反田古墳に関しては，発掘調査による記録保存の措置をとることとなり，昭和55年8月に中国四国農政局広島中部台地開拓建設事業所から県教育委員会に対して提出された八反田古墳発掘調査依頼を受け，県教育委員会では昭和56年4月13日から5月21日までの延べ5週間にわたって発掘調査を実施した。

調査を実施するにあたり，中国四国農政局広島中部台地開拓建設事業所，同世羅支所，世羅町教育委員会，地元徳市，安田地区の方々から多大な御協力を受けた。記して謝意を表したい。

# Ⅱ 位置と環境

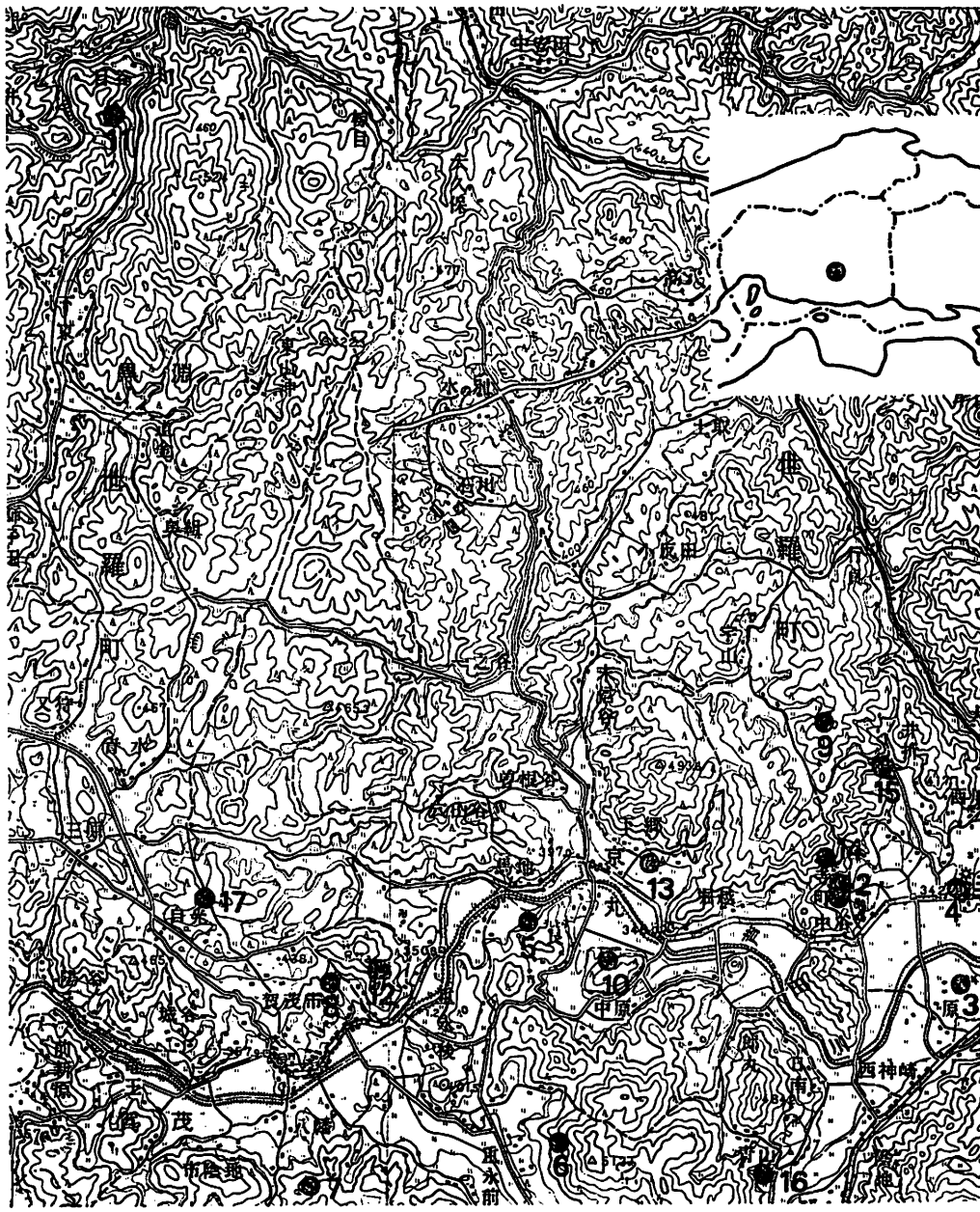
八反田古墳は，広島県世羅郡世羅町大字徳市字八反田に所在し，標高約400 m，眼下に小開析谷を望む丘陵南側斜面に立地する。

遺跡の位置する世羅郡一帯は，芦田川上流にあたる標高約300～600m 前後のいわゆる世羅台地と呼ばれる高原台地で，全体としては比高約150m 前後の比較的なだらかな丘陵部分と，いくつかの小河川によって形成された谷盆地から成立っている。特に芦田川流域にかけては広い盆地がひらけ，県の内陸部では三次市に次ぐ遺跡の密集地として知られている。

現在世羅郡内では縄文時代前期まで溯る遺跡は確認されていないが，[1] 中期以降になると，頓迫遺跡（甲山町川尻），大池遺跡（世羅町東神崎），桑ノ木遺跡（甲山町宇津戸）などの遺跡があり，頓迫遺跡からは中期後半から晩期の土器や石器にともなって住居跡状の落ち込みが確認されている。[2]

弥生時代になると遺跡数はしだいに増加する傾向を示す。前期の遺跡としては全国的にも数少ない漆塗りの土器を出土した箕口１号遺跡（世羅町寺町）や，２棟の住居跡が発見された同２号遺跡があるのみであるが，中期になると世羅盆地周辺の微高地を中心として，原遺跡（世羅町西神崎），音丸遺跡，世羅高校敷地遺跡（同町本郷），大田遺跡（同町東神崎）などの諸遺跡が知られており，このほか小児用の甕棺を出土した乙川遺跡（甲山町小世良）などの遺跡がある。後期になると郡内の各所で遺跡がみられ，大久保遺跡（世羅町西神崎）や，この時期の墳墓と思われる近重山遺跡（世羅町東神崎）のような大規模な遺跡が出現する。昭和45年に発掘調査が行なわれた藤鞘遺跡（世羅町本郷）では，２棟の円形竪穴式住居跡の中から，壺，甕形の土器とともに，ガラス製の小玉が出土している。また，この時期の祭祀遺跡として，県内では広島市東区安芸町福田出土の銅鐸に次いで２例目の銅鐸を出土した黒川銅鐸出土地（世羅西町黒川）がある。[3]

古墳時代に移ると，遺跡数は飛躍的に増加し，世羅郡内では700基余りを数える古墳が築造されている。このうち前半期に属する古墳としては，内部主体に竪穴式石室を有する永安寺古墳（世羅町中原），寺上山古墳（世羅町重永）や，箱式石棺を有す



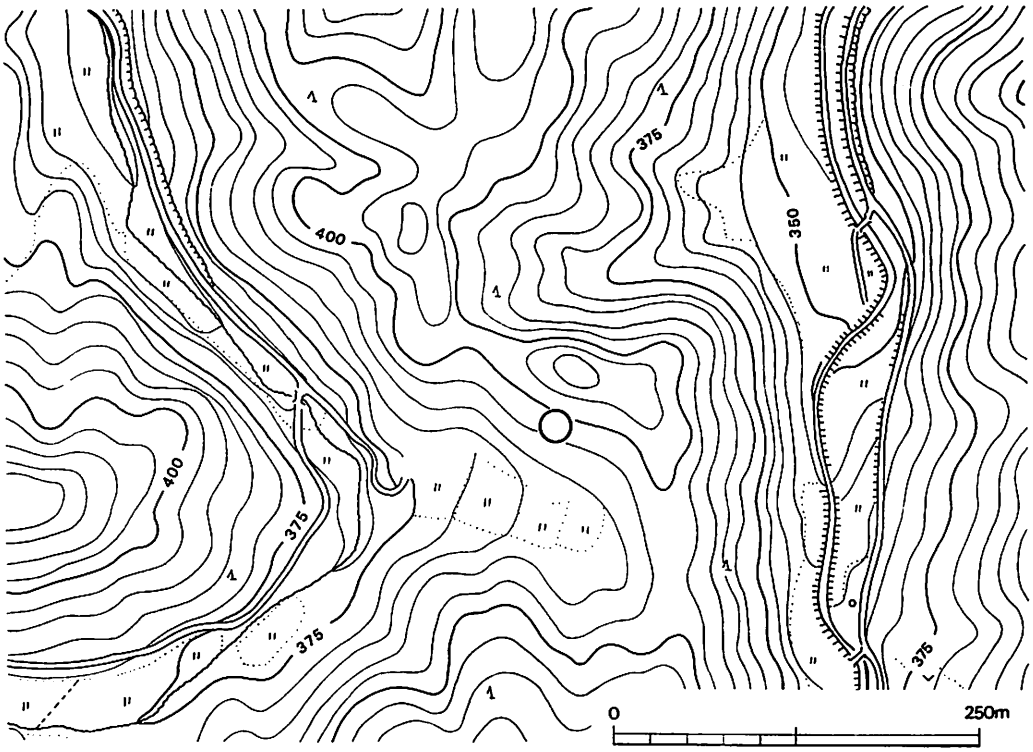

第1図　八反田古墳付近遺跡分布図（1/5万）（承認番号 昭和56中複，第202号）

1 箕口1号遺跡　2 箕口2号遺跡　3 原遺跡　4 音丸遺跡　5 永安寺遺跡
6 寺上山古墳　7 宮迫古墳　8 建石1号古墳　9 でんびら古墳
10 船山1号古墳　11 八反田古墳　12 神岡4号古墳　13 神田2号古墳
14 康徳寺古墳　15 助迫山古墳　16 大迫山4号古墳　17 自光窯跡

る宮迫古墳（世羅町加茂），往生平古墳（世羅西町山福田）のほか，建石第１号古墳（世羅町加茂），でんびら第１号古墳（同町井折），船山第１号古墳（同町中原）などの古墳が知られている。また，古墳ではないが，竜王山２号遺跡（甲山町伊尾）からは前半期の土師器片が出土している。

後半期に入ると，横穴式石室が導入され，郡内のすみずみまで築造されるようになる。これらの大部分は，玄室と羨道の区別の無い，奥行３～５ｍ程度の小規模な横穴式石室で，今回発掘調査を実施した八反田古墳もその範囲に入る。数基で一つの古墳群を形成しているものが多く，花崗岩の露頭する緩斜面の山腹を掘り込んで構築されている。しかしその一方では，康徳寺古墳（世羅町寺町）や竜王山第11号古墳（甲山町伊尾）のように，盆地を見おろす微高地上に，奥行が８ｍを超すような横穴式石室も構築されている。このような古墳群のあり方は，大化前代の一つの地方社会の実態を反映しているものとして把握されている。(4)

横穴式石室の多くは早くから開口され，いくつかの出土品が伝えられているが，そ




第２図　遺跡位置図（○印が八反田古墳）

の中で神岡第４号古墳（世羅町加茂），助迫山古墳（同町井折），大迫第４号古墳（同町青山）からは須恵器の装飾付壺や，子持脚台坏が出土している。さらに，これと同様の破片は京梨池窯跡（世羅西町上津田），自光窯跡（世羅町重永）などの須恵器窯跡からも出土しており，両者の有機的関係を窺うことができる。

なお，終末期に属する古墳に神田第２号古墳（世羅町堀越）がある。[5] 切石を使用した平入式の横穴式石室を持つこの古墳は，羨道の閉塞施設として石室玄関部に石扉を有することが特徴で，備南に点在する同期の古墳とともにそのあり方が注目されている。

次の歴史時代に入ると，郡内唯一の奈良時代の寺院跡として知られる康徳寺廃寺がある。この寺院跡からは，備北に独自の分布圏を持つ水切瓦が出土しており，前述した終末期古墳などとの関係が考えられる。

注　1　世羅郡内の遺跡の分布については，木下忠「原始・古代の世羅郡」『広島県文化財ニュース』No.20　1963年や，是光吉基「世羅郡内の遺跡」『広島県文化財ニュース』No.77　1977年にくわしい。なお，詳細な点に関しては向田裕始氏の御教示を得た。

2　小都隆「世羅郡甲山町頓迫遺跡について」『芸備』第５号　1977年

3　松崎寿和・潮見浩・藤田等「広島県（備後国）世羅西出土の銅鐸」『広島大学文学部紀要』第26巻１号　1966年

4　木下忠「後期古墳群の諸問題―広島県の場合―」『考古学研究』第９巻第１号　1962年

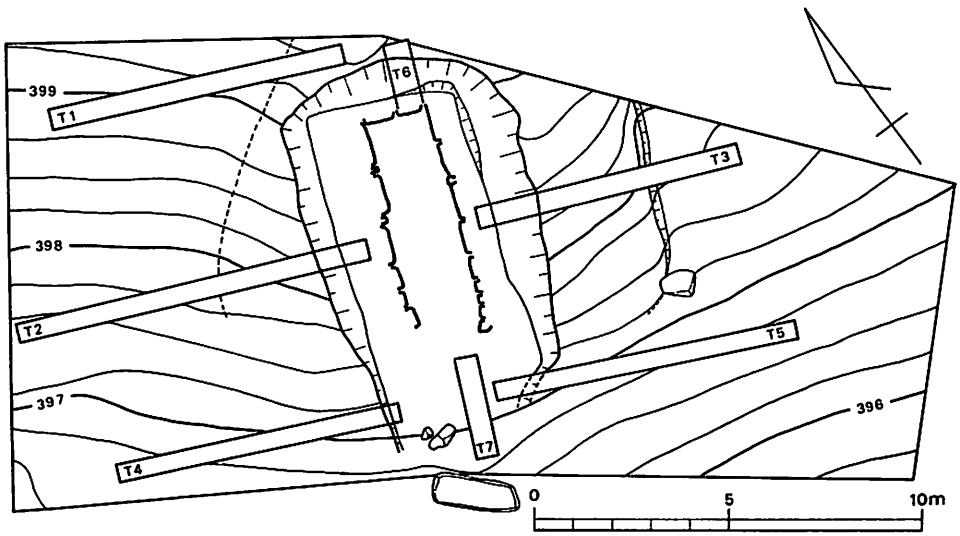
5　芸備友の会『広島県の主要古墳』芸備第９集　1979年

# Ⅲ　調査の概要

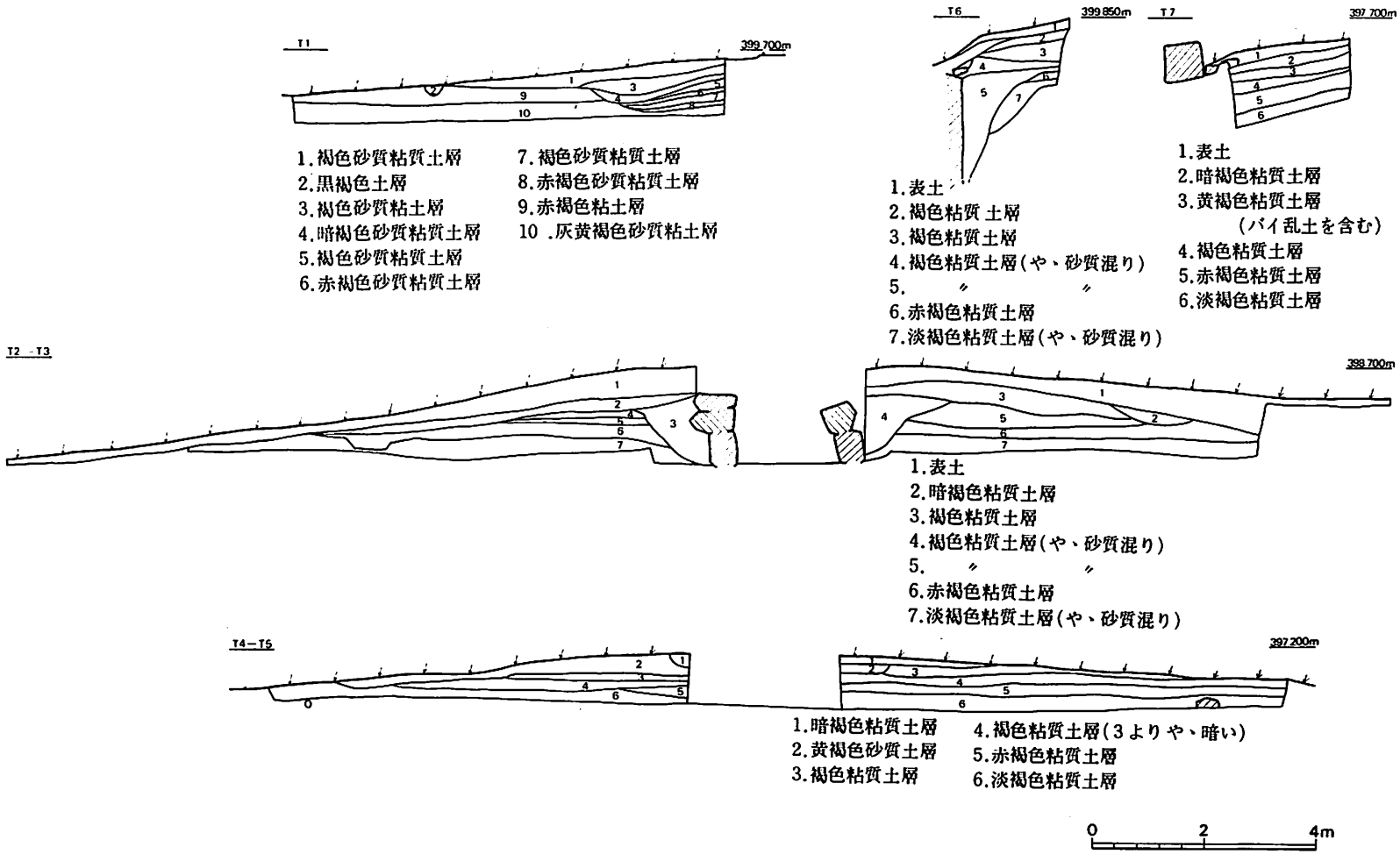
古墳はすでに天井石が崩落し墳丘盛土が流出していたため，まず石室の主軸方向にあわせて墳丘を４区に分割し，表土剝ぎ作業を行った。この過程で墳丘南側裾部と西側裾部に須恵器破片が数点出土したのみで，葺石，周溝等の施設は検出することができなかった。

次に墳丘盛土確認のため石室主軸に直交して５本（$T_1$ ～ $T_5$），石室主軸方向へ２本のトレンチをそれぞれ設定した。この段階で一部墳丘裾部（$T_3$第２層）と石室掘り方を確認した。

石室内部は，長さ２*m*程度のものをはじめかなりの天井石が崩落した状況にあったため，それらの石を小割りにして排除し，掘り下げの作業を進めていった。崩落石の排除を終了した段階で石室前面に木炭が，奥壁近くに敷石が存在していることが確認され，この面の検出にあたった。この木炭層より第７図２の鉢の破片１点のみで他の遺物は全く出土しなかったため，当初この木炭層は中世頃に形成されたもので，古墳本来の床面とは異なるのであろうと推測し，敷石のみを残して玄室内を６区画に分け，さらに掘り下げていった。こうして40～50*cm*で花崗岩のバイラン土層に到達したが，




第３図　八反田古墳地形図


T1
399.700m
1.褐色砂質粘質土層
2.黒褐色土層
3.褐色砂質粘土層
4.暗褐色砂質粘質土層
5.褐色砂質粘質土層
6.赤褐色砂質粘質土層
7.褐色砂質粘質土層
8.赤褐色砂質粘質土層
9.赤褐色粘土層
10 .灰黄褐色砂質粘土層
T6
399.850m
1.表土
2.褐色粘質 土層
3.褐色粘質土層
4.褐色粘質土層(や、砂質混り)
5. 〃 〃
6.赤褐色粘質土層
7.淡褐色粘質土層(や、砂質混り)
T7
397.700m
1.表土
2.暗褐色粘質土層
3.黄褐色粘質土層
(バイ乱土を含む)
4.褐色粘質土層
5.赤褐色粘質土層
6.淡褐色粘質土層
T2 -T3
398.700m
1.表土
2.暗褐色粘質土層
3.褐色粘質土層
4.褐色粘質土層(や、砂質混り)
5. 〃 〃
6.赤褐色粘質土層
7.淡褐色粘質土層(や、砂質混り)
T4—T5
397.200m
1.暗褐色粘質土層
2.黄褐色砂質土層
3.褐色粘質土層
4.褐色粘質土層(3よりや、暗い)
5.赤褐色粘質土層
6.淡褐色粘質土層
0
2
4m

第4図 墳 丘 断 面 図

本来の床面と考えられる面も遺物の検出をみなかった。石室のほぼ中央部で比較的大きな石が数点地山に接して出土した。なお，石室入口部，両側壁における２～３点の下段の石の下底面がこの焼土，敷石のレベルとほぼ一致しており，このことからこの木炭層，敷石層が古墳本来の床面と考えておきたい。なお，奥壁に接して２個の大石（天井石）を崩落した状態で検出しており，この石の間より第７図１の須恵器坏蓋が出土した。敷石はすべて花崗岩の扁平な石を用いており，この部分ではこれに類する石が出土しなかったことから考えれば，当初から敷石を有しなかったか，あるいは何らかの目的で排除した後に天井石の崩落があったものとも考えられるが，現状では判断できない。いずれにしろ本石室は遺物の検出がないため確認できないが，中世頃に何らかの目的で再利用しており，２～３cm程度に灰層（木炭を主とする）が堆積していることから，かなり頻繁に火が焚かれたものと考えられる。おそらくその際に副葬品がすべて持ち去られたものと推測できる。

最後に石室構築の際の掘り方を掘り下げ，石室の積石の背面を露出した。なお，右側壁部外側で５～６点の石が検出されたが，比較的不安定な状態にあるため控え積等の機能は果たしていないものと考えられる。

### １　地山整形

古墳の前面と背面がすでに迂回路と工事用道路のためにカットされており，地山の整形状況に関しては十分把握することができなかったが，第４図に示す各トレンチのセクションにみられるように地山の淡褐色粘質土層の上部に堆積している赤褐色粘質土層の下底面が傾斜地であるにもかかわらずほぼ水平に堆積しており，あるいは淡褐色粘土層上面を整地したとも考えられる。$T_2$トレンチ第６層の赤褐色粘質土層の落ち込みもこうした際に形成されているのかもしれない。

石室構築時の掘り方は，下底で長さ約９ｍ，幅約４ｍ，上端部で長さ約10ｍ，幅約６ｍの平面形がほぼ羽子板状の壙を作っている。床面はほぼ水平に削平している。主軸は等高線にほぼ直交しており，傾斜面に横穴式石室を構築する場合最も一般的な方法といえよう。

## 2 墳　丘

前述のようにすでに天井石が崩落し，墳丘盛土が流出していたため明確にその範囲を確認することはできなかったが，一部$T_3$トレンチ第2層の暗褐色粘質土層（第4図）が墳丘裾部に相当すると考えられ，このことからすれば直径12.8$m$程度の円墳になるであろう。石室全体の規模からすればやや墳丘が小さすぎる嫌いもあるが，立地条件からすれば盛土そのものにはそれほど視覚的効果を考慮しなくてもよかったものと考えられる。周溝，葺石等の外部施設は何ら検出できなかった。なお，石室背後の$T_1$トレンチ東側で12～13$cm$程度の厚さで6層にわたる版築状の堆積が認められる（第4図）。東側の延長部分はすでに工事用道路が建設されており確認することができなかったが，墳丘背後の地山をある程度削平した後に版築状に土を堆積しているものと考えられる。堆積土には特別築き固めた痕跡や，遺物の包含は認められない。

## 3 石室構造

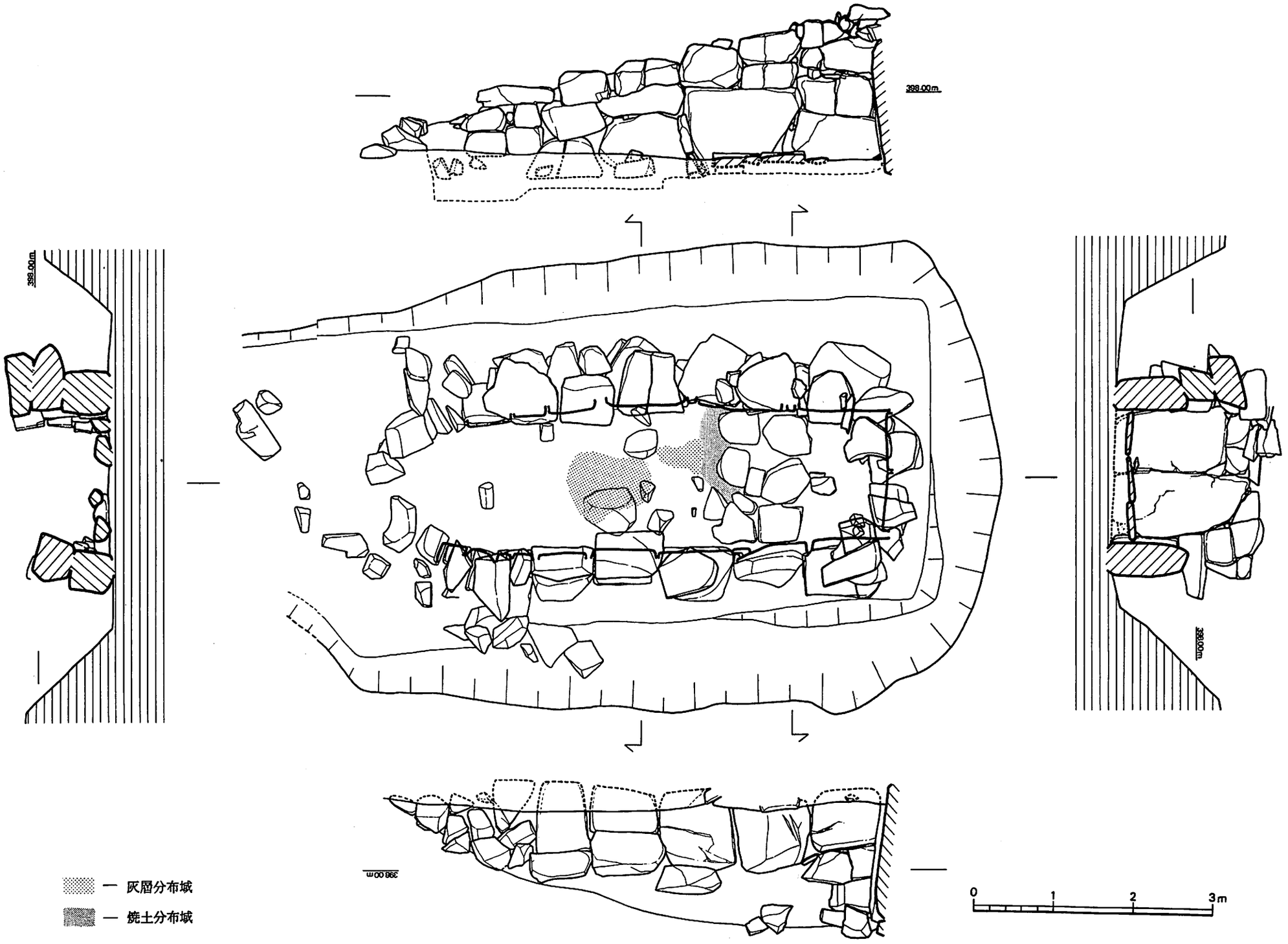
石室は，主軸をN—24°—Eにとり，南西部に開口している。奥行き5.3$m$，幅は入口部で1.5$m$，中央部で1.8$m$，奥壁部で1.6$m$を測り，やや中脹らみ，無袖の長方形の平面プランをとる。高さは，奥壁部で敷石面上から約1.8$m$を測る。石材はすべて花崗岩の比較的扁平なものを使用しており，右側壁は上部の石がくずれており十分な観察はできなかったが，左側壁部からみた構築状況によると，5～6個の1×1$m$程度の比較的大形の石材を立てて腰石とし，その上に扁平な石材を，小口を向けて縦にほぼ目地が通るように重箱積みに積み上げている。石室の構築順序としては，両側壁の腰石を奥壁部から石室入口部に向けて並べ，同様に奥壁部から入口部の順で二段，三段と積み上げ，最後に奥壁の板石を立てかけるようにしている。両側壁はいくぶん持ち送り気味に石を積み上げている。なお，この際一段目の石を据え，その高さまで盛り土を行い，更に二段目の石を積み上げ，盛り土を行うという石室構築の作業手順を推測することができるが，石室掘り方の土層観察からはその痕跡を確認することはできなかった。また，右壁の掘り方部分に5～6個程度の石を認めることができるが，特別据えたような状況もうかがえず，すべてかなり不安定な状態にあることから，裏込め等を特に意識してのものではないと考えられる。なお，石室入口部分に左右両側へ各2～3個ずつ比較的小形の花崗岩の割石を並べており，外護列石を意識した石列であろう。その他，石室入口部分に数個の石が床面に埋め込まれた状態で検出されて

おり，閉塞石の残りとも考えられる。ただ，両側壁の入口部分から1.4～1.5 m程度のところまでの石の積み方がかなり不規則な積み方をしており，それより奥の部分の積み方とは全く異なっていることからすれば，本来の閉塞部分がもう少し中に入っていた可能性も考えられるが，現状で判断することは不可能であった。

敷石は，50×50×10cm程度の扁平な花崗岩製の大き目の割石を横に3枚ずつ二列に並べ，その間の隙間に同様の扁平なやや小さ目の石を敷き，表面を平らにしている。地山と敷石との間には，約15cm程度暗褐色粘質土を敷きつめている。なお，敷石と奥壁との間は，二個の大石が崩落した状況にあり，敷石が最初から存在しなかったものか，排除された後に天井石の崩落があったのかは定かでない。石室入口部分へかけての敷石の有無も確認することができなかった。なお，奥壁から3 m程度のところに，地山に据えた状態で60×60×30cmほどのかなり大きな石をはじめ数個の石が認められるが，すべて床面下に入っており，特別何らかの機能を意図して置いたものとは考えられない。

### 4　石室平面プラン

近年横穴式石室が一定の尺度をもって構築されているのではないかという議論がさかんに論じられるようになってきた。福岡平野では，5世紀～6世紀中葉に構築された横穴式石室はすべて晋尺系の尺度（1尺＝24～26cm）を使用し，以後6世紀末前後に高麗尺（1尺≒35cm）の使用へと変わったと指摘されている。[(1)] 一方，山口県内でも30cmを1尺とするものと，35cmを1尺とするものの二種類があるとの指摘がある。[(2)] 広島県内ではまだこうした研究は試みられておらず，基礎的な資料も提示されていないので，ここで大系的な論述を試みることはできないが，すでに推察されている尺度を適用すれば，本古墳は30cmを1尺とする尺度が最も適合していると考えられよう（第6図1）。その他，周辺部に分布する古墳で時期的にも，石室の形態も似ているものとして，甲山町龍王山第9号古墳[(3)]と福山市の永谷第1号古墳[(4)]の石室平面形を掲載した。これらの古墳も30cmを1尺とする尺度に適合している。30cm前後を単位基準とするこれら3基の古墳には共通した横穴式石室の規格性も推察することができるが，これが地域的なものなのか，あるいは時期的なものなのかは今後の研究に待ちたい。ただ，こうした尺度基準を考える場合，終末期の切石積みの石室以外は石材の大きさに左右され，尺度の基準をどこにおくかにやや不明瞭な点があるし，また現在推察されてい




第5図 石室実測図

るような晋尺系や高麗尺系の尺度が単なる横穴式石室の基礎単位のみにしか用いられなかったのか，あるいは住居など当時の社会のあらゆる尺度基準であったのかという配慮も必要であろう。

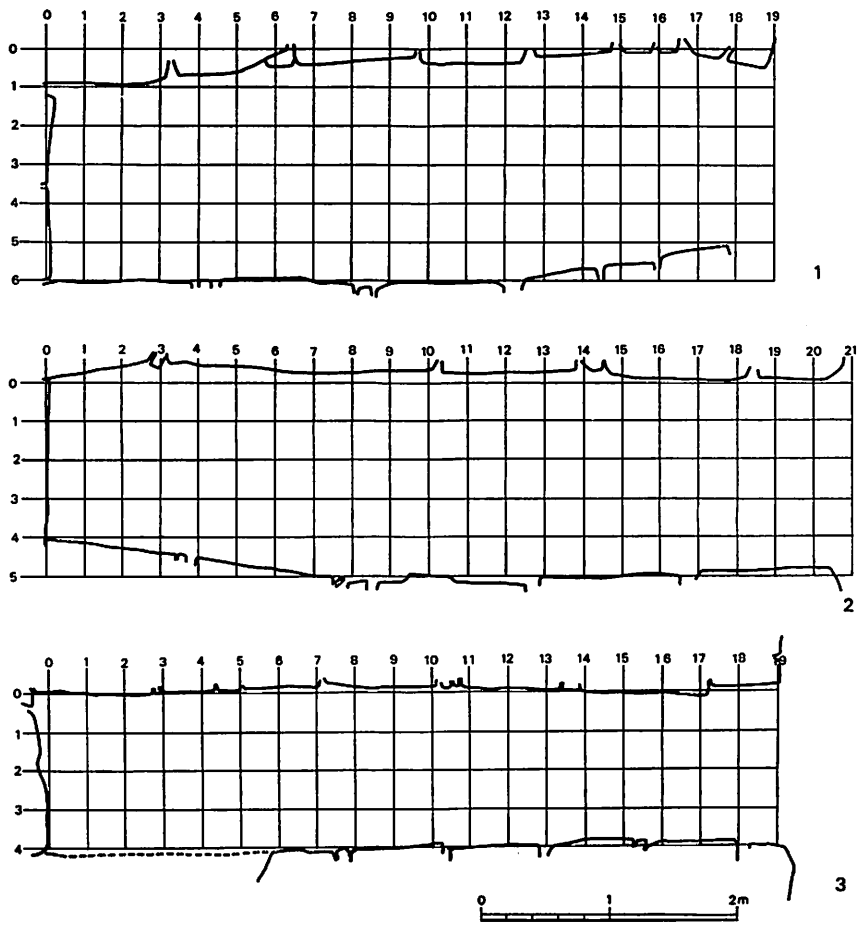
注　1　柳沢一男「北部九州における初期横穴式石室の展開」『九州考古学の諸問題』　1975年

福岡市教育委員会『広石古墳群』　1977年

2　山口県教育委員会『白石古墳群』　1980年

3　龍王山古墳群発掘調査団『龍王山古墳群』　1971年

4　広島県教育委員会『緑ケ丘遺跡群発掘調査概報』　1974年




第6図　石室平面プラン（方眼単位は30cm）

1　八反田古墳　　2　龍王山第9号古墳　　3　永谷第1号古墳

# Ⅳ 遺　　物

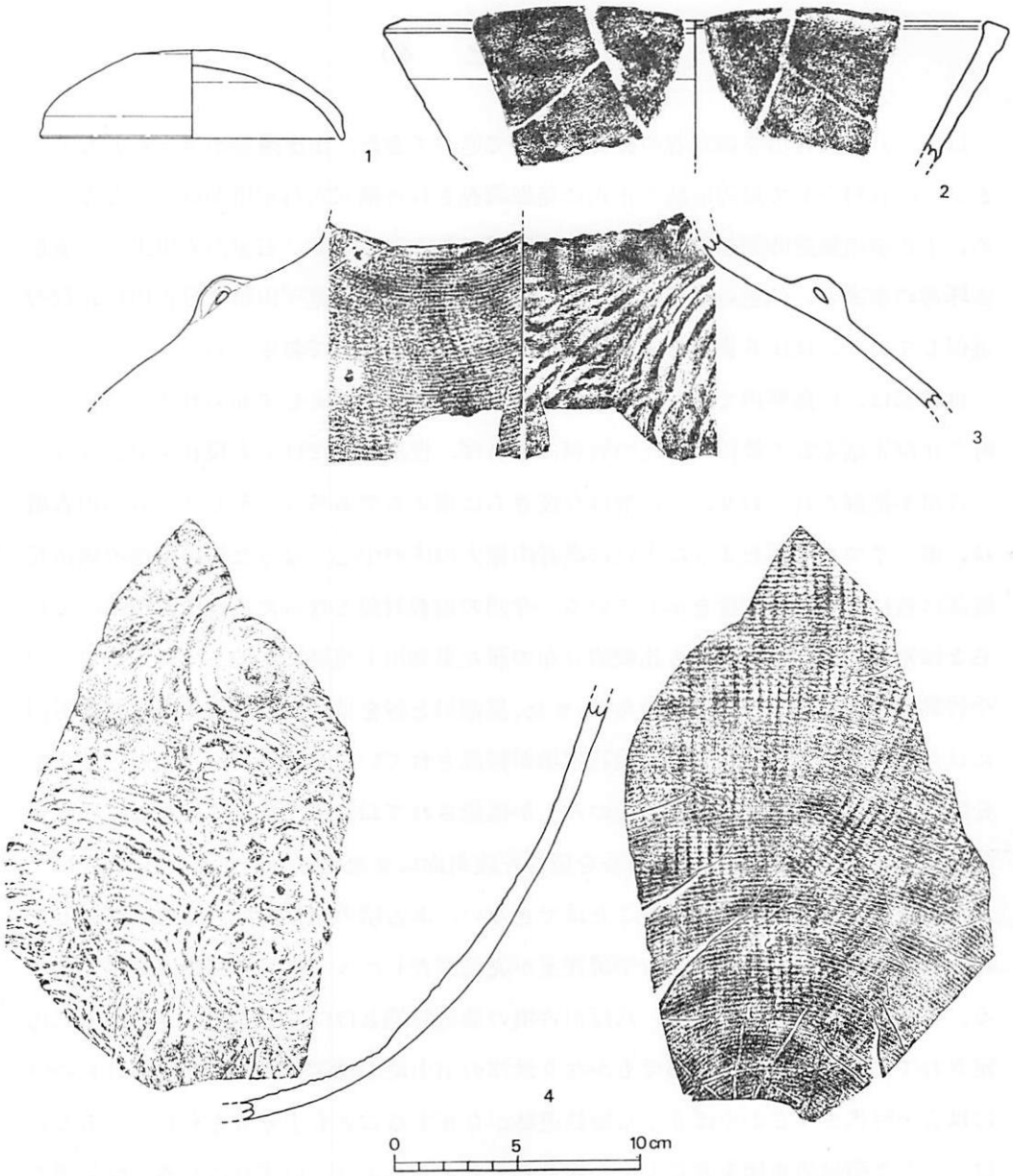
石室内はすでに完全な盗掘にあっており、玄室奥壁部の崩落した天井石のあいだに落ち込むようにして出土した須恵器坏蓋１点（第７図１）と玄室入口部付近の焼土面直上から土師質の鉢片（２）が１点出土したのみである。なお，３，４に示した須恵器片の他数点の須恵器破片が墳丘西側及び東側裾部から出土している。これらの中には墳丘表土中から出土したものと墳丘盛土中から出土したものとがあり、両者が１部接合することから，本来はすべて本古墳築造の際に墳丘盛土中に含まれていたと考えることができよう。

須恵器坏蓋（１）口径12.5㎝，器高3.6㎝を測る。天井部はやや平らでゆるく内湾ぎみに口縁部へと続き，端部は外湾ぎみに垂直に下る。粘土紐巻き上げ痕の痕跡を一部残すが，比較的丁寧な仕上げである。胎土は密であり，１㎜程度の砂粒を含む。焼成は良く，堅緻である。色調は暗青灰色を呈する。

須恵器壺（３）推定頸部径16㎝，胴部最大径40㎝近くになると考えられる比較的大形の壺の肩部破片である。把手は１カ所しか残っていないが，四耳壺の可能性が強い。胎土は密であり，焼成は良好，堅緻である。色調は青灰色を呈する。

その他，４の甕の底部破片も含めて数点の須恵器破片が表土及び墳丘盛土中から出土している。両者に一部接合資料の存在することから，これらの須恵器片は墳丘盛土中に混入したものと考えられる。いずれも胎土は密であり，焼成は良好，堅緻である。なお，４の甕の底部にヘラ記号がつけてあるが，特異な点といえる。

土師質土器（２）推定口径24㎝を測る鉢である。小片であり全体の概要を把握しにくいが，口縁部内面がやや突出し，平担な口唇部を形成する。外面調整はナデに依っているが，粘土紐巻き上げの痕跡を残し，やや粗雑な仕上げである。内面は比較的丁寧な横ナデ調整を施している。胎土中には0.2～１㎜大の砂粒を多量に含み，焼成は甘く，脆弱である。色調は淡黄褐色を呈する。片口の存否は現状からは推測不可能である。




第7図　出土遺物実測図

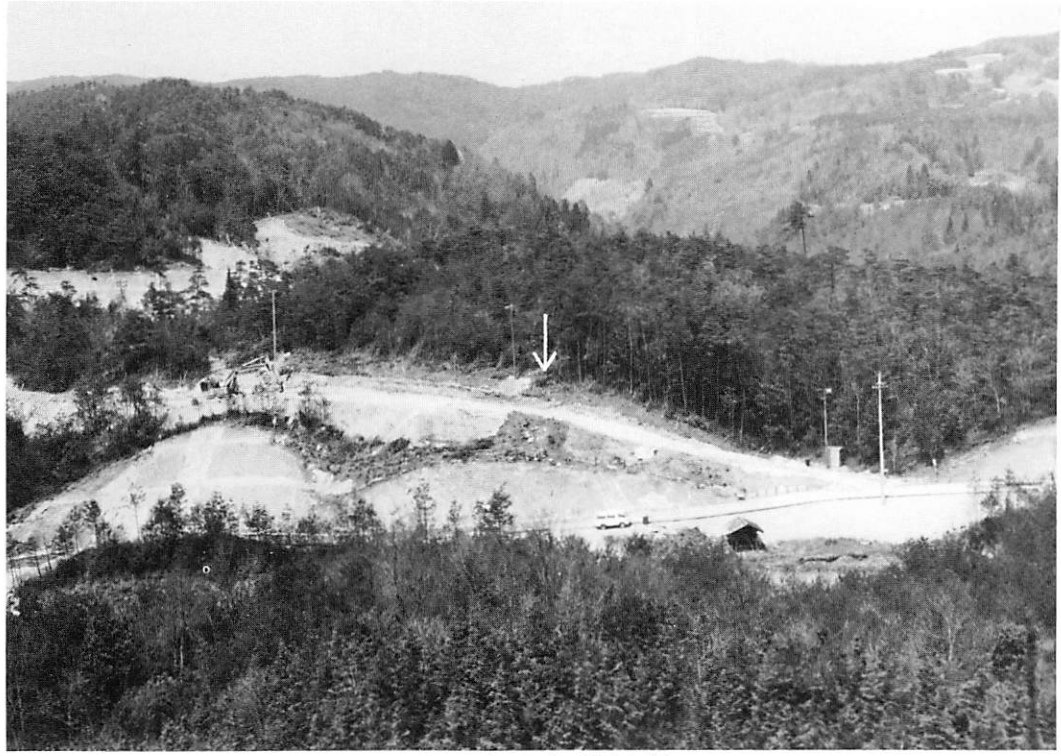
# V まとめ

以上，八反田古墳発掘調査の概要について述べてきた。出土遺物がほとんどなく，また比較資料として周辺地域で正式に発掘調査された横穴式石室墳がほとんどないため，本古墳の築造時期を限定することは困難である。しかし，石室から出土した須恵器坏蓋の型式と，側壁の構築状況が甲山町伊尾に所在した竜王山第9号古墳に比較的近似しており[1]，ほぼ6世紀終末から7世紀初頭頃と把握しておきたい。

世羅郡は，広島県内でも非常に古墳の分布が稠密な地域として知られている。世羅町文化財審議委員の波田一夫氏の資料によれば，世羅町内だけでも現在すでに335基の古墳が把握されており，その数は今後さらに増えるであろう。そしてこれらの古墳は，第Ⅱ章でも触れたように中世に高野山領大田庄の中心となった世羅盆地の周辺丘陵部に特に高い分布密度を示している。今回の調査対象となった八反田古墳は，それらとは対照的に世羅町内でも比較的分布の疎な黒淵川上流域に立地している点で，やや特異な存在を示しているといえる。また，黒淵川と谷をはさんだ反対側の丘陵南斜面には分布調査で7～8基の横穴式石室墳が確認されているが，八反田古墳の立地する丘陵斜面には現在まで本古墳1基のみしか確認されておらず，単独で存在していた可能性が強いといえる。狭小な開析谷を望む丘陵斜面に立地するという点から，背後にそれほど豊かな生産基盤を考えることはできない。本古墳の南東方向，直線距離にして約5㎞の地点に，広島大学考古学研究室が発掘調査したカナクロ谷製鉄遺跡が存在する。これは新聞報道によれば，八反田古墳の築造時期とほぼ同じ頃の6世紀後半に比定されている。当地域周辺部でもかなり鉄滓の出土地が確認されており，それらの中には古墳時代までさかのぼりうる製鉄遺跡が存在することも十分考えられる。あるいはそうした製鉄者集団を背景とした墳墓とも考えられよう。いずれにしろ，緊急調査による記録保存という形ではあったが，世羅町内において最初の横穴式石室墳の発掘調査であり，盗掘のため出土遺物がほとんどなかったことから被葬者の性格を論ずるまでには至らなかったが，今後の研究の基礎資料の一つとして提示したい。

注　1　龍王山古墳群発掘調査団『龍王山古墳群』　1971年

# 図　　版



a　八反田古墳遠景

b　調査後の遠景

a　表土剝ぎ後（南より）

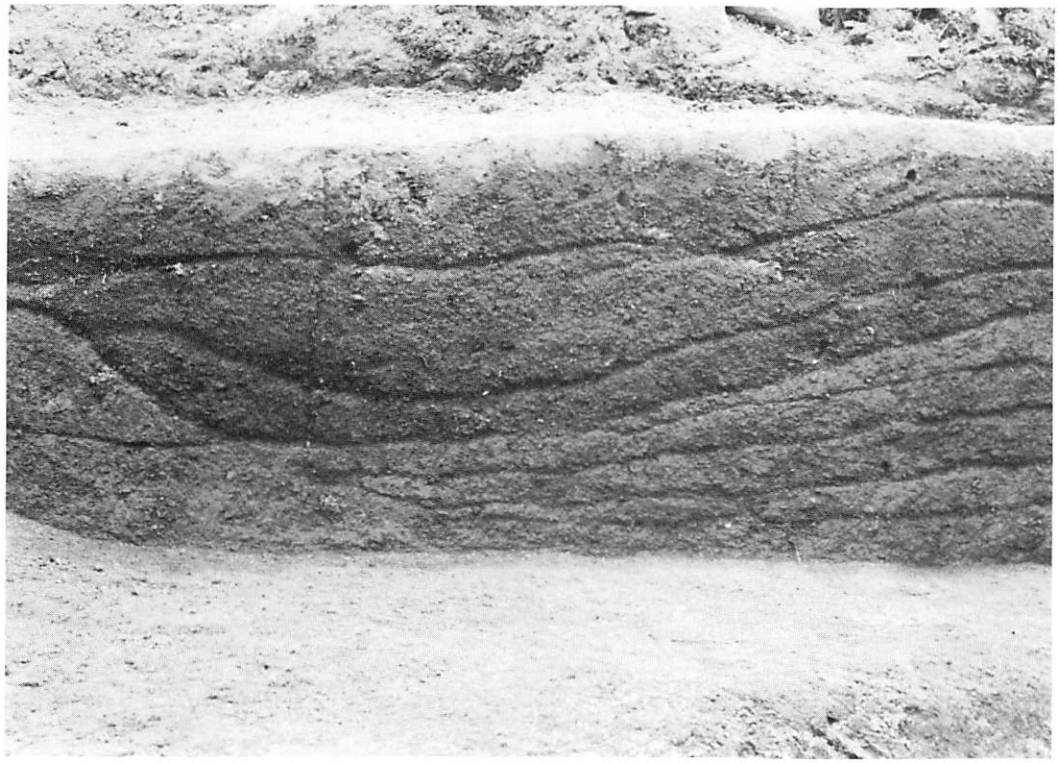
b　表土剝ぎ後（西より）

a　石 室 全 景（南より）

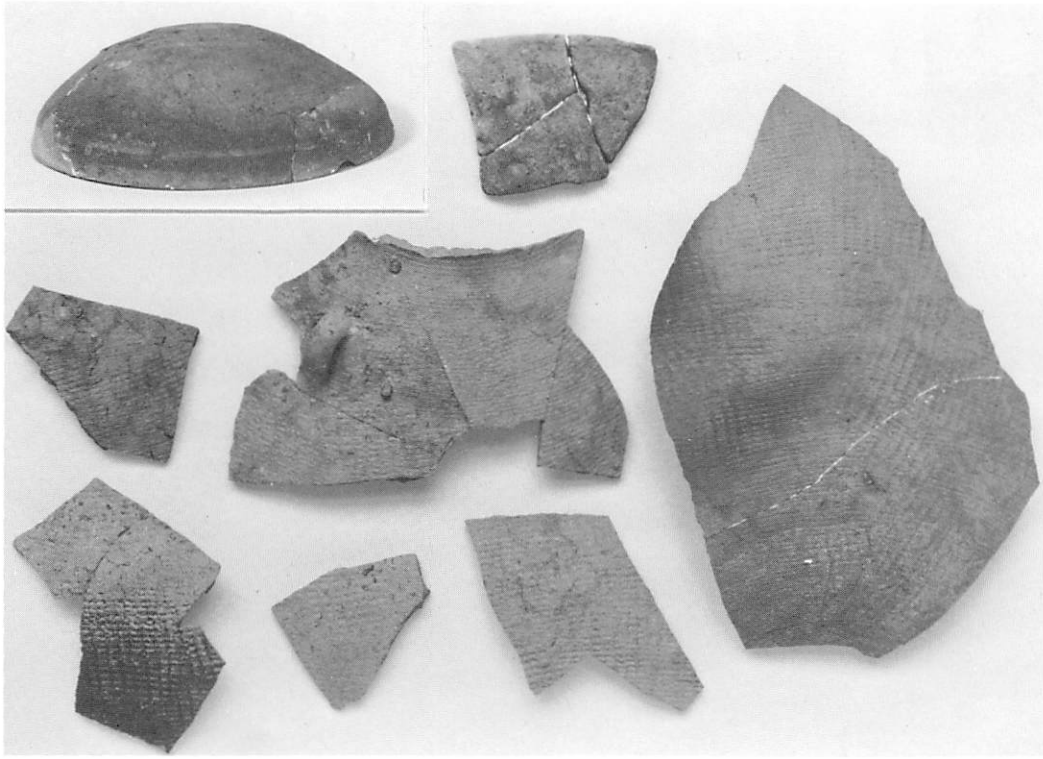
b　同　　上

a　石室全景（完掘後，東より）

b　左側石積み状況



a　T1 トレンチセクション



b 出 土 遺 物

a 調 査 風 景

b 遺 跡 見 学 会

昭和56年(1981) 9月30日

八反田古墳

編集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター
発行 広島県教育委員会
印刷 朝日精版印刷株式会社